

関西学院大学 研究成果報告

2018年3月19日

関西学院 院長殿

所属：商学部
職名：教授
氏名：山本俊正

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：タイ国 ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	1) キリスト教と平和思想の研究 2) 世界及びアジアのエキュメニカル運動における平和と正義の取り組みに関する研究 3) タイキリスト教団におけるキリスト教平和運動の歴史と実践の研究 注：3) は申請時には「カナダ合同教会」と記されていたが、留学地変更に伴い訂正。
研究実施場所	タイ国、チェンマイ、パヤップ大学（宗教・文化と平和研究所）
研究期間	2017年9月21日～2017年12月19日（3ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

1) キリスト教と平和思想の研究

客員研究員として所属したパヤップ大学の研究機関であるIRCP（Institute of Religion, Culture and Peace=宗教・文化・平和研究所）にて、本課題の研究と学びを深めることができた。具体的には、IRCPが大学院博士課程の学生に提供している平和学の授業（英語）に参加し、課題の文献、テキストを読み、院生、指導教員との意見交換をすることが出来た。IRCP所長のDr. Tony Waters氏の授業では、タイ国及び近隣諸国（ミャンマー、ラオス等）に散在する少数山岳民族への抑圧と抵抗の歴史、難民キャンプの実像と平和構築との関係について学んだ。また、同研究員であるDr. Le Ngoc Bich Ly女史の授業は、「宗教性と平和構築」（Religiousness and Peacebuilding）を学期の主題としており、タイの仏教僧と神学者との対話による授業や、タイの女性が置かれている社会的位置と宗教性との関係などの講義、学生の発表を通して、平和構築に多様な宗教がタイの文脈の中で、どのように貢献出来るかについて、学びを深めた。文献として精読し、議論の基礎とされたのは、宗教間対話平和構築研究の方法論として、「Interfaith Theology」(by Cohn-Sherbok, Dan, 2001)、また宗教と暴力の関係については、「Terror in the Mind of God」(by Juergensmeyer Mark, 2000)などが使用された。

私自身の研究に関しては、全学開講の形でIRCPが主催をした講演会で発表する機会が与えられた。(別紙、講演会チラシ参照)「平和と和解」について、日本における憲法9条の役割と有効性の議論を紹介し、旧約聖書に登場する預言者イザヤの平和思想とビジョンについて説明した。また、キリスト教の非暴力主義の伝統に触れ、宗教と平和構築の関係性に言及した。講演の後半では、日本のNGOが作成した、「鬼を退治しなくなかった桃太郎」のアニメ動画を紹介し、アクティブ・ラーニングの手法を用い、平和と非暴力の関係についてロール・プレイ、グループワークを行った。参加者は学生、教職員を含め、約60名であった。

2) 世界及びアジアのエキュメニカル運動における平和と正義の取り組みに関する研究
 パヤップ大学の学長室棟に併設され、事務所を置いているCCA (Christian Conference of Asia=アジアキリスト教協議会)は、日本を含むアジア15カ国にある100以上のプロテスタント教派が加盟するアジア最大の地域、エキュメニカル(教会一致運動)団体である。1957年に創立されたCCAには、60年間の歴史の中で寄贈され、また自らが出版してきたアジアのキリスト教と平和及び社会正義に関連する文献がCCA事務所内にある図書館に所蔵されている。留学期間中、CCAの図書館に通い、多くの英語で書かれた文献を収集し、コピーすることができた。また、現在CCAの責任を負っている総幹事のDr. Mathews George氏、人権及び平和問題担当の幹事、Dr. Rey Ty氏を数回に亘りインタビューする機会があり、質疑、意見交換を通して有益な情報及び示唆を受けることができた。また、アジアのエキュメニカル運動に関連しては、2017年10月11日から17日まで、ミャンマー、ヤンゴンで開催されたCCAアジア宣教会議に出席することができた。CCAに加盟する教会、教会協議会、キリスト教協議会の代表者、エキュメニカル関係団体、宣教師、神学者、宣教学者、神学生、他宗教からの代表等、総勢600名以上がアジア及び世界各国から参集した国際会議であった。会議は60年間に亘るアジアの教会の信仰と宣教、平和と正義実現の取り組みを振り返ると同時に、神の宣教を共に担うアジアの教会が、これから作られる歴史の中で、何が求められ、何を大切にしていくのかを模索し、協議することが意図されていた。なお、この会議の報告については、留学期間中、雑誌「キリスト教文化」(2017年秋号、かんよう出版、ISBN978-4-906902-93-4)から寄稿を依頼され、報告が掲載された。また、このCCA宣教会議と同時進行で行われたCCA主催のAsian Ecumenical Institute (アジア・エキュメニカル研究会)では、アジア各国からの教職者を対象に、「History and Activities of Ecumenical Movement in Japan」(日本のエキュメニカル運動の歴史とその取り組み)と題して、2コマ(各90分)の講義を担当した。(詳細プログラムについては、留学期間中の海外出張報告資料参照)

3) タイ国キリスト教団 (Church of Christ in Thailand=CCT)におけるキリスト教平和運動の歴史と実践の研究

この研究課題については、留学申請時初期にカナダへの留学を予定していたため、「カナダ合同教会」の研究と記されているが、留学場所をタイ国に変更したため、タイ国キリスト教団 (CCT)の研究に変更されている。

本課題に関する研究は、タイ国キリスト教団 (CCT)の成立及びタイにおけるキリスト教の歴史に遡り、資料を精読することから開始した。特にタイのプロテスタント教会の歴史は、バンコクなど南タイへの宣教活動に加えて、北部タイ、パヤップ大学が位置するチェンマイが宣教の拠点であったことを学んだ。また、タイのプロテスタント教会は北部の農村から拡大し、現在のパヤップ大学、神学部の設立、タイ国キリスト教団 (CCT)の誕生(1934年)と大きく関係していることを示す資料を収集し、精読することが出来た。特に、英文で書かれている著作、「Khrischak Muang Nua」(by Herbert R. Swanson, Chuan Printing Press 1984, ISBN:974-340-311-6)には、タイ北部、チェンマイの宣教の歴史、最初に受洗した人の人数、名前、背景等を含め詳細に記述されており資料文献として有益であった。さらにこの著作には、1662年にフランスのローマ・カトリック神父(複数)が「サイヤム・シャム=Siam」にて宣教開始を開始したこと、1828年以降、複数の欧米プロテスタント教会が宣教を開始した記述もあり、タイにおけるキリスト教宣教の歴史の全体像を学ぶことができた。中でも19世紀のロンドン宣教会 (LMC=London Missionary Association)宣教師の伝

道活動、アメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Mission=ABCFM）派遣宣教師夫妻の活動も詳細に記録されており、中国や日本への宣教の歴史とリンクさせて読むことが出来た。本課題に関する研究ではPAYAP大学神学部長・大学宗教主事のDr. Satanun Boonyakiat氏（Chaplain, Payap University & Dean, McGilvary College of Divinity）、同神学部教授、米国長老教会宣教師、Rev. Dr. Esther Wakeman, 氏（Former Chaplain, Payap University & Professor, McGilvary College of Divinity, PCUSA missionary）に数回インタビューする機会があり、収集した文献に書かれている歴史、PAYAP大学のキリスト教教育の現状と課題等についても意見交換することができた。なお、タイ国キリスト教団（CCT）の平和と正義の取り組みについては、バンコクを訪問した際、Dr. Prawate Kidharn氏（タイ国キリスト教団、エキュメニカル関係担当副総幹事）をインタビューする機会があり、資料提供、教団の活動内容について学ぶことが出来た。上記2つの研究課題同様、収集した資料の読み込み、関連文献の精査などは、今後の課題として行きたい。以上。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。